

# 「自写」經典の宋の地における開版小考

——宋人の一例と九条道家の例——

牧 野 和 夫

はじめに

文暦二年（1235）の九条道家の「四天王寺阿弥陀經供養願文」は、我が国の施財・祈願による宋の地における開版事業の企画を含むという点で特異であるのみならず、道家が文暦二年仲春に「阿弥陀經一卷を自写し以て宋朝に送り、模刻し十萬卷を雕印流布（施印）させようとしたこと」、即ち、「手自写」という行為が加わる点でも看過しがたい特徴がある。明らかに道家には、唐土の「施印」という作善が意識されていた（2008年5月末のシンポジウム「海を渡る天台文化」〈2008・5・31〜6・1 於浙江省天台県天台賓館〉での発表）。自写の經典の刻雕は、おそらく道家の書写（書体）を刻す、ということとで写刻体

の經典刊行を意味し、手づから「書寫」の「功德」をも残そう、と考えたのであろうか。既に和漢比較文学会特別例会（2015 於西安大学）における発表で明らかにした点も加えて、ここに紹介する。それは、名家・名筆とは考えがたい宋人の「自寫」の經典を版下にした開版の実例であり、宋代の大藏經補刻において手づから「書寫」の「功德」が作善として意識されていた例（しかも寫刻体を採用したものである。翻って、日本の九条道家の場合について、従来の指摘は「宋版經典への恐れが更に一歩進んだもの」とするが、近年の研究の進展を踏まえるとき、道家の営為は、どのような旨趣・経緯・背景をもって実行（この可能性は高いが）されたのであろうか。この点の解明は「道家の宗教的構想」を考える上で重要か、と推測し、以下の

順に若干の検討を試み概略を記すものである。

一、宋人「自寫」經典の写刻体刊行について

二、「阿弥陀經」一卷を自写し以て宋朝に送り、模刻し十万卷を雕印流布（施印）させようとしたこと」の経緯

—道家・慶政・成阿弥陀仏・了行・頼賢—

a・I…道家・慶政・了行

a・II…道家・慶政・成阿弥陀仏・頼賢

三、まとめにかえて…その史的背景

—鎌倉前中期における仏法の〈倭漢相和〉について—

一、宋人「自寫」經典の写刻体刊行について

本源寺蔵宋版一切經に拠ると、『本源寺宋版一切經目録』通番号1843の『阿育王經』卷八・九は、二經同卷で千字文番号「寫」函に収納されていたが、総板数十一板の第十一板の卷末に「孤子劉■元伏為 考妣二親自寫／大藏教典二函付工鏤印■」と刻印されている。この施財刊語は、同じ「寫」函収納の1844『阿育王經』卷十の卷末にも次のように存在する。「孤子劉會元伏為 考妣二親自寫／大藏教典二函付工鏤印上資生界」と刷印されている（一部、磨滅甚だしく宋人手か、墨補筆）。

本源寺蔵一切經の「寫」函は東禪寺版で現存する経卷は、

1841 衆經撰雜譬喻 卷下4 8板（9板  
以下欠）やや写刻体を残す。

1842 阿育王經 卷6・7 18板

①～⑰なし⑱楊定安

1843 阿育王經 卷8・9 11板

①①孤子劉■元伏為 考妣二親自寫／大藏  
教典二函付工鏤印■

1844 阿育王經 卷10 11板

①①孤子劉會元伏為 考妣二親自寫／大藏  
教典二函付工鏤印上資生界

である（醍醐寺蔵『雜譬喻經』卷上による野澤住美氏の指摘がある（『印刷漢文大藏經の歴史—中国・高麗篇』平成27・3刊）。

幸いに近時刊行をみた『醍醐寺蔵宋版一切經目録』第四冊によれば、「寫」函はやはりすべて東禪寺版で、『捨錢刊記』が「孤子劉會元伏為考妣二親自寫／大藏教典二函付工鏤印上資生界」とあるものは、「4492衆經撰雜譬喻卷上（十三）・4493衆經撰雜譬喻卷下（十四）」林元刀・4494阿育王譬喻經・阿育王經第一（十四）・4495阿育王經第二・阿育王經第三（二十）陳通刊・4496阿育王經第六・阿育王經第七（十八）林用・4497阿育王經第八（十）林用・4498阿育王經第九（十一）。

4499 阿育王経第十（十一）である。

本源寺蔵1842『阿育王経』巻6・7、この帖の18板刻工が、醍醐寺本では「林用」になっており捨銭刊記がある。本源寺本18板では「楊寔」に変わっており、しかも尾題記の後ろに他経本文が天地逆に刷印されている。混合帖・写刻体の問題に係り、三蔵（東禅寺版・開元寺版・思溪版）に携わった刻工の問題が俄かに浮上するので、若干記述を試みる。

「楊寔」は本源寺本では思溪版の大般若、摩訶般若、大

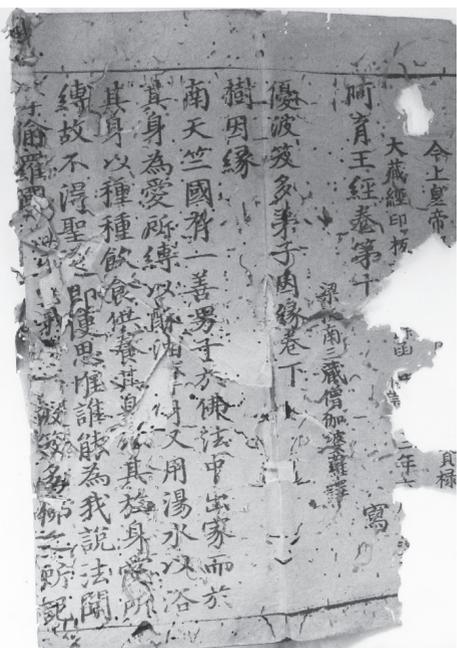


図1…本源寺蔵『阿育王経』巻十（千字文番号「寫」）巻頭

方等大集経に出てくる刻工であるが、書陵部本では開元寺版の19点の帖冊に出てくる刻工である。本源寺蔵一切経の通番1842『阿育王経』巻6・7の一帖は開元寺版一板が入った混合帖、とすべきであろう、と考える。「林用」は、醍醐寺本では48例で、全て東禅寺版に携わった刻工である。開元寺版と思溪版とに跨る刻工の問題に刻工「楊寔」は重要な手がかりを提供するのである。従来、混合帖の存在を想定することのない研究状況のなかで、刻工「楊寔」は、東禅寺版・開元寺版・思溪版の三蔵版に関与した刻工として処理されてきた。しかし、刻工「楊寔」は、開元寺版・思溪版の二蔵に共通する刻工ではあるが、東禅寺版に関与した刻工ではない。書陵部蔵一切経では、『阿育王経』巻6・7は紹興戊辰（十八年）閏八月の題記をもつ開元寺版で、刻工名は「①丘与②林近、③蔡寧、④崔榮、⑤陳從、⑥陳生、⑦王保、⑧王詢、⑨鍾才、⑩陳文、⑪張友、⑫石祐、⑬李傑、⑭鄭受、⑮林賜、⑯郭文、⑰林近、⑱楊寔」であり、すべて開元寺版に認められる刻工名であり、18板は刻工楊寔の担当したものである。

東禅寺版1842「阿育王経」に流用された開元寺蔵の版本による刷印の一紙が混合帖として混入していたことによる相違であり、東禅寺版の新たな補刻葉ではない。

醍醐寺蔵一切経では、千字文番号「禽」函に該当する帖

冊には、通番4501～4508に当たるが、すべて【捨  
錢刊記】「孤子劉會元伏為考妣二親自寫／大藏教典二函付  
工鏤印上資生界」はない。

醍醐寺蔵一切經の千字文番号「獸」函に該当する  
4510『法句譬喻經』卷第一以下の十帖冊には、『法句  
譬喻經』卷第一を除く九帖冊すべてに【捨錢刊記】「孤子  
劉會元伏為考妣二親自寫／大藏教典二函付工鏤印上資生  
界」が認められる。

このことは、【捨錢刊記】の「大藏教典二函」が、まさ  
に千字文番号「寫」「獸」の「二函」を指すことを示して  
いる。醍醐寺蔵一切經4510『法句譬喻經』卷第一に【捨  
錢刊記】「孤子劉會元伏為考妣二親自寫／大藏教典二函付  
工鏤印上資生界」がない理由は、【卷末刊記】に（重雕刊記）  
「乙酉重雕住山解空大師慧明」とあり、「乙酉」の歲に重雕、  
すなわち補刻したことで、孤子劉會元の捨錢刊記は勿論、  
写刻体も失われたのであろう。「乙酉」は、1105年・  
1165年・1225年のいずれか、おそらくは、乾道元  
年（1165）に該当する（醍醐寺目録も同様の見解）。  
1165年に補刻を必要とする磨滅或いは破損状態に板木  
があったことが予想されるわけで、「孤子劉會元」の【捨錢】  
版刻という考妣二親の為の功德善行は、1165年を遡る  
かなり昔の補刻（勿論、原刻葉ではない）と考えられるの

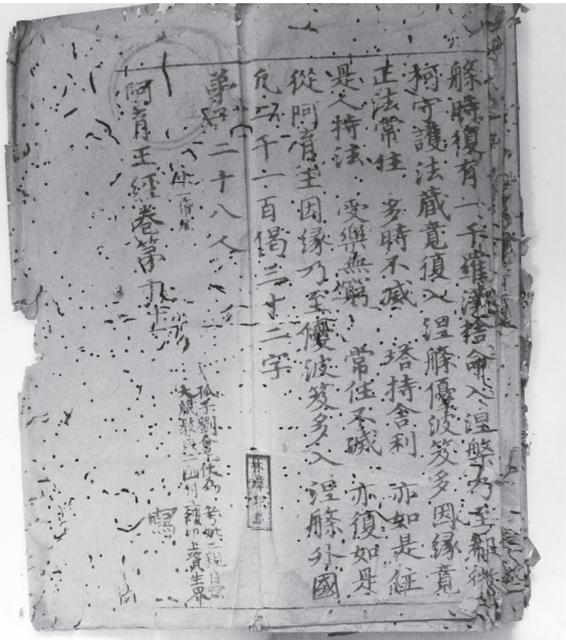


図2解説…本源寺蔵1844『阿育王經』卷10（千字文番号「寫」）、  
第11板・尾題・施財刊語「孤子劉會元伏為 考妣二  
親自寫／大藏教典二函付工鏤印上資生界」、末尾「資  
生界」他、宋人の手に係る墨補筆あり。經本文、字  
様には写刻体がかなり残る。

である。

写刻体の問題として考えると、き本源寺蔵一切經では  
1802『出曜經』卷一などが好例であろう。写刻体が第

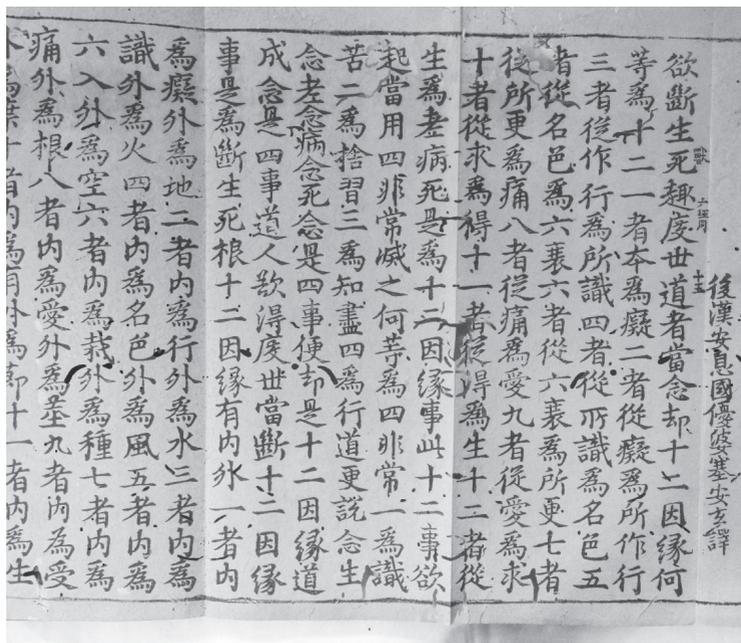


図3…本源寺藏『阿含口解十二因縁経』（千字文番号）(獣)

2～7板、第12・13板に見られるが、ほかの板は補刻葉で写刻体ではないからである。南宋代の写刻体経巻のもつ位置取りはいかなるものであったのか。すなわち、手づから自から書写した写経（宋代における写経の功德の問題を惹起する）を写刻体に刻彫する宋代の経論書についての問題は、すべて今後の課題である。

二、九条道家「阿弥陀経一卷を自写し以て宋朝に送り、模刻し十万巻を雕印流布（施印）させようとしたこと」

―道家・慶政・成阿弥陀仏・了行・頼賢―

既に『法然上人絵伝』第三五巻（角川書店、日本絵巻物全集）の以下の引用を示して九条道家の宋の地での出版問題に及んだことがある（牧野「十二世紀後末期の日本船載大蔵経から奄然将来大蔵経をのぞむ」〈王勇・吉原浩人氏編『海を渡る天台文化』2008・12 勉誠出版〉）。

「同四月五日御臨正念にして念仏數十遍禪定に在るかごとくして往生をとけさせ給ぬ御とし五十八なり 上人左遷ののちいく程なくてこの御事きこへけり 御あはれをしはかるへし後の京極殿ハさきた、せ給ぬ その御子東山の禅閣家督にて御あとをうけつかせ給き月輪殿御帰依の餘慶をうけおなしく上人の勸化を御信仰ありけりことに六方恆沙

の諸仏の証誠をたうとみて阿弥陀經十萬卷摺写の大願をおこし、かた木を異朝にひらかせられて摺写の弘通をひろくせらる。かの經おほく吾朝に流通せり。發願の志趣經の奥にのせらる。かの状云、十萬の写功によりて萬徳の尊容を礼し弥陀の説法をき、て普賢の願海にいり随類の形を化現して、旧上の徒を慈愍し、あまねく長夜のねふりをおとろかしてひとしく覚悟の暁にいたらしめむ。衆生無始の身宴坐た、眼にあり、塵点劫數の業こゝろをしつむるに念をいてす哀哉この筆舌はしめてこの言語をかたらむ事、ねかはくハ紫金の毫光、白骨の微功をてらし給へとなり時文曆第二歳乙未仲春第二日、從一位藤原朝臣道家敬白云々發願のむね自他をかね、異朝にをよほしてその願を果たされける御ころさしまことたうとくも侍かな」

という一節である。この絵伝の一節の内容を補強する資料が『本朝文集』第六十六（『国史大系』）所収の「菅原為長」撰「藤原道家供養阿彌陀經願文」である。佚書か、と思われる「『願文集』四」に収められた一篇である。適宜抜書する。

「抑隨正像末之世、有教行證之益、正像早過、行證亦衰、澆季之俗、厥欲何為、但雖臨末法萬年、餘經悉滅之期、非無彌陀一教、利物偏増之憑、吾等深信金言之誠諦、一向宜懸素望於安養、然則專帰阿弥陀之

教、須盡書讀持之力、手欲寫三十萬口口、不レ可レ叶、縱雖保三二十年、難レ終レ功、仍先擊一巻於爪掌、專染一楚筆、雖隔千里之面目、整一寄宋朝彫新板一兮、摺寫甚盡、付一歸舟一兮、運送無レ程、彼朝縱有張伯英之苗裔、咲非臨池之墨妙、當時已得彌陀樹之華文、歛軼照隣之壁輝、欲謂之震旦之模範、字々皆弟子之筆跡也、欲謂之弟子之筆跡、文々震旦之模範也、倭漢相和、古今未レ聞、

（略）

觀海日之浸レ浪、則不レ信二十黃億刹之僻遠。思土風之無レ塵。亦不レ異四十八願之莊嚴。舍利之現神變也。烏纏之佛牙不レ可レ覃。聖靈之留真容也。鶴林之生身尚如在。君王輔佐者。家之玄縱也。白古賢及今愚久伝。佛法興隆者。身之素意也。白少年至大位未レ忘。

（略）

倭漢相和。古今未レ聞。消玄英初四之日。瀝丹實無式之露。詣六百餘歲之伽藍。」

古く集古会々員三村竹清が淡々とこの事実を記述し、集古会々員には周知のことであつたが、この点に関しては「集古会と宋版研究」と題した別稿を予定している。

この願文に東洋史の一事実として学問的に注目した森克己氏「宋版一切經輸入に対する社会的考察」（『加藤博士還

曆記念 東洋史集説』(昭和17年 富山房)は、次のように評価したのである。

「この宋版經典への懼れが更に一歩進んだものは、藤原道家の如き場合である。すなわち、彼が嘉禎三年九月四天王寺に進めた阿弥陀經供養の願文の中には

(中略…この引用文は<sup>42</sup>前引「願文」箇所)

と書写し、これを宋に送って模範とし、自己の筆跡の模刻を以て阿弥陀經十萬卷を雕印させ、自筆写經に代えているのである。殊に、宋版經典の輸入に刺戟され、わが国においても印刷術が発達して春日版や高野版等が現れ、部分的な經典印刷が行われたが、仏教復興期たる鎌倉中期以後の澆刺たる気運は遂に宋版一切經の輸入を以て満足せず、国内において一切經を彫印しようと企てるものが現れて来た。」

という。この背景については、入宋僧を軸にした遁世僧のネットワーク(渡来の宋人と「包修」の世界)を視野に容れる必要がある(牧野和夫「鎌倉前中期の寺院における出版」(『アジア遊学 中世寺社の空間・テキスト・技艺』2014・7 勉誠出版)、浄土教と我が国の出版事業との深甚な係りについて踏み込んだ考察が必要であろうが、ここでは触れない。

「宋版經典への懼れが更に一歩進んだもの」という指摘は興味深いが、「懼れ」という道家の内面的な姿勢とは別の勸進僧のネットワークを縦横に活用した九条道家側の宗教思想史的(同時に政治史的)な「現実」とそれに対応した「宗教的な構想」が指摘できるのではないか。その概略を近年解明された「九条道家とその周辺」の事実を紹介しつつ、以下に簡略な指摘を試みる。

#### a・I…道家・慶政・了行

九条道家と南宋との係りについては、宋版大藏經の舶載について考えるのが捷径であろう。慶政と「了行」を介した道家と南宋との緊密な係わりについては、既に「宋版一切經補刻葉に見える「下州千葉寺了行」の周辺」(『東方学報 京都』第73冊、2001)以下、「中世前期学僧と近世書写一寺院縁起をめぐる二、三の問題」(『実践国文学』76号 2009・10)等に至る拙論類で指摘推測した。了行なる千葉寺僧と九条家・慶政(九条道家の兄、とするのが通説)との繋がり背景には千葉秀胤と將軍頼經との関係が存在し、了行が文暦元年(一二三四)から仁治元年(一二四〇)の七、八年間の一時期に渡宋したこと、東寺藏宋版一切經『大涅槃經』(福州開元寺版)巻八・三一・三二・号二・三五・二一七の刊記に「日本国下州千葉

寺比丘了行捨」とみえることから明らかなように、宋版大藏經の補刻事業に慶政のもと（この点は未だ十分な考察はなされていない）で関与した僧侶であること、などが明らかになった。千葉秀胤は評定衆で三浦泰村の妹婿にあたるが、寛元の政変で一時失脚し、宝治合戦で三浦氏とともに滅亡した人物である。了行が千葉氏一族で千葉氏の被官となった原氏の出身であることを指摘したのは、野口実氏「了行の周辺」（『東方学報 京都』第73冊、2001）である。

ここで「了行」という耳新しい僧名が留意されるが、石井進氏「日蓮遺文紙背文書」の世界―双紙要文紙背文書を中心に―（『石井進著作集第七巻 中世資料論の現在』〈2005 岩波書店〉初出1991）に展開した日蓮遺文紙背文書中に、九条家と千葉氏との間に介在し、しかも道家の意を体して千葉氏に用途などの沙汰を命じる立場にあった「れうきやう」なる僧と同一人物か、と推定されている。また、建長の政変で幕府に捕縛・処刑された「了行」であろう、と推測できる僧侶でもある（野口・牧野共同発表・1998）。

了行の渡宋は事実であったこと、しかも「文暦元年（一二三四）から仁治元年（一二四〇）の七八年間の一時期」に渡宋して帰朝していたことが判明したのは、平成

十九年度に文化庁の補助事業として滋賀県教育委員会が実施した「滋賀県所在古経典緊急調査」で発見された知礼述『観音玄義科』一卷（滋賀県愛荘町金剛輪寺所蔵の聖教）の奥書によってである。

「嘉禎三年（丁／酉）七月二日、於東洛楊梅大宮一乘弘通之法家十一面觀世音菩薩宿房書寫了、此科前代未度也。而了行上人渡唐之時求得此科本帰朝次将来。于時嘉禎二年（丙／申）夏」

嘉禎二年（一二三六）夏、『観音玄義科』を携えて了行の帰国したことが明らかとなった（大谷「新出資料 金剛輪寺蔵 知礼述『観音玄義科』」〈『南都佛教』第九二号、二〇〇八年〉）。前引した牧野「十二世紀後末期の日本船載大藏經から尙然将来大藏經をのぞむ」でも、「了行の渡宋時期の一二三五年は、正に道家が「かた木を異朝にひらかせられて摺写の弘通を」期した「文暦第二歳乙未仲春第二日」、即ち一二三五年に当るのである。俄かに『法然上人絵伝』第三五卷所載記事が信憑性を帯びてくる。慶政上人の介在を考慮するならば、道家の仏説阿弥陀經の異朝開版（伝承問の多少の「誤り」の幅は認める、として）の一件と了行の渡宋とが無縁ではない、と考えるべきであろう。

道家の「宗教的な構想」（光明峯寺をめぐる宗教構想については松本郁代氏『中世王権と即位灌頂』〈二〇〇五年、

森話社刊)の一環として慶政・了行・頼賢(渡宋・帰朝時期が各々ずれるか。各々の「位置どり」は異なる、と考えられる)などの渡宋が行われた、と見ることもできる(牧野「慶政と聖徳太子信仰―宋版一切経補刻事業を軸に―」〔『仏教史学研究』五〇巻一号、二〇〇七年十一月〕。〔『海を渡る天台文化』2008・12 勉誠出版〕

經典などの施財開版(補刻を含む)が宋代の唐土で功德としていかに重いものであったか、道家は十分了解し、阿弥陀経開版・十万部流通を積極的に南宋の唐土に求めた結果であろう、と考えるべきか、と結んだ。その点に關しては現在も同じ見解である。

#### a・Ⅱ…道家・慶政・成阿弥陀仏・頼賢

九条道家が慶政の係わる南都の寺院堂塔修理に少なからぬ関与をもっていたことは、嘉禎三年(一二三七)四月八日には九条道家の北政所の沙汰として万燈会が法隆寺講堂で行なわれ、慶政の法隆寺復興修理と道家の關係の深さを暗示させる。

「四月八日。万燈会并五百七十坏供養勤行之。坪別二銭百文米二升配。但万燈会油直等(九条大殿道家之北政所御沙汰也。五百坏供養并五十種捧物等(慶政勝月房上人御勸進也。件供養時奉行。尊円井尼成阿弥陀仏。覚増。幸禅等

也。於講堂前。一日一夜大法会。色衆十人。講師少輔僧都璋円。」

慶政と聖徳太子信仰については、牧野「慶政と聖徳太子信仰―宋版一切経補刻事業を軸に―」〔『仏教史学研究』五〇巻一号、二〇〇七年十一月〕などを参照願いたい。嘉禎三年(一二三七)四月八日の記事中「五百坏供養并五十種捧物等(慶政勝月房上人御勸進也。件供養時奉行。尊円井尼成阿弥陀仏。」として登場する「成阿弥陀仏」とは、なにもものであるか。

堀池春峰氏「法隆寺と西山法華山寺慶政上人」〔『南都仏教史の研究』巻下、昭和57・4 法蔵館〕において、この尼僧について、次のように触れている。

「次に嘉禎二年四月、三年四月・九月・十二月に慶政とともに勸進比丘尼成阿弥陀仏として名をとどめる女性について一考してみよう。管見によれば、寛喜四年(一二三二)三月、東大寺八幡宮に大般若会を創始し、大般若經一部、心經七十一卷、法華經一部等を十六善神を描いた扉を有する厨子とともに奉納した成阿弥陀仏がある。この大般若經は嘉祿二年四月より寛喜三年におよんで、書写勸進せられ、いわゆる東大寺八幡經と称せられるものである。この時金光明最勝王經一部十卷が同じく書写奉納せられているのは、成阿の表白に、

次最勝妙典者。王法要道也。殊寶麗水之珍。奉祈金闕之尊。遙迨千劫而流布。久守九禁

という明記や、「王法護持之計、猶契百王之後」という字句より推して、成阿の発願が、女身転身を祈願する意趣より起ったとしても「王法要道」として最勝王経を書写奉納している点に、成阿が地下の人にあらず、宮廷あるいは権門関係者であったと推測せしめる可能性が多分に宿されている。けだし真如等と同様、藤原氏の一族であろう。」

この成阿弥陀仏に関しては、近時、開催された説話文学大会（2016・6・25於慶応義塾大学）のシンポジウム「聖徳太子と説話」において「中世聖徳太子伝記の一隅―成阿弥陀仏など―」と題した報告を終えている。その一部の内容は『説話文学研究』誌に既に入稿・校正も済み近刊予定であるので、参照願いたい。

嘉禎四年（橘寺の塔完成）以前、餘にも荒廢した橘寺の復興修理のため、橘寺は洛東の大谷口に勧進所を設けて勧進を行ったが、その勧進の中心に成阿弥陀仏がいたこと、その協力的な立場に慶政がいたこと、などが明らかになった。ちなみに、大谷口に設けられた勧進所が後に寺院化した。西大寺律宗の京洛の拠点と見做されてきた白毫院（寺）となることも推定可能となった。

東大寺八幡宮へ奉納された大般若経は「東大寺八幡経」

と呼称されて諸家に分蔵するが、この「東大寺八幡経」の書写・経蔵造営の勧進を指揮したのも成阿弥陀仏であることは知られていた。嘉祿二年（一二二六）東大寺僧秀恵、東大寺八幡経卷第一書写、「比丘尼成阿弥陀仏此経勧進之根源」と（安貞二年（一二二八）迄に書写完了か）、寛喜元年（一二二九）夏、東大寺八幡経を納める御経蔵造営の爲の勧進始まる（仁治二年（一二四一）迄）

しかし、「東大寺八幡経」の経蔵造営の勧進に応じた奉加者の「嘉禎四年六月十五日／前陸奥守源朝臣義氏（花押）」など奉加の追記がしばしば認められ、結縁衆五百人・畿内から東国にも及ぶ勧進が執行され、その中に足利義氏も奉加に加わっていることは餘り留意されていない。複数の書寫識語には海内浪靜天下平穩などが必ず祈願されており、武蔵・相模両国の比丘尼が参加していることも考慮に容れるならば、撰関家主導の中で承久乱（源平合戦も含める）に係った京方・鎌倉方の遺族なども含めて執行された奉加の姿勢を読み取ることもできる。承久の乱後の朝幕関係は比較的安定したものであったが、道家の影響力は足利義氏などの奉加に見られるように幕府内にも及びつつあった、と考えられる。

頼賢という僧の遁世・渡宋・唐本一切経将来并下醍醐施入については、宇都宮啓吾氏紹介の「祖師相承聞書」に認

められる頼賢の出自などの伝承と併せて、近時刊行した以下の拙論に詳述しているので、ここに縷説することはしない。ご参照願えれば幸いである。

「延慶書写時の延慶本『平家物語』へ至る一過程―実賢・実融…一つの相承血脈をめぐって―」（『アジア遊学 根来寺と延慶本『平家物語』』〈2017・6〉）

「宋版一切経の舶載に係る一、二の問題―実賢・（頼賢―実融）という相承に沿って―」（『実践国文学』91号 2017・9）

### 三、まとめにかえて…その史的背景

―鎌倉前中期における仏法の〈倭漢相和〉について―  
九条道家は「菅原為長」撰「藤原道家供養阿彌陀経願文」中に

「(略) 観<sub>レ</sub>海日之浸<sub>レ</sub>浪、則不<sub>レ</sub>信<sub>三</sub>十黄億刹之僻遠<sub>一</sub>。思<sub>三</sub>土風之無<sub>レ</sub>塵。亦不<sub>レ</sub>異<sub>二</sub>四十八願之莊嚴<sub>一</sub>。舍利之現<sub>三</sub>神变<sub>一</sub>也。烏纏之佛牙不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>覃。聖靈之留<sub>三</sub>真容<sub>一</sub>也。鶴林之生身尚如<sub>レ</sub>在。君王輔佐者。家之玄縦也。白<sub>三</sub>古賢<sub>一</sub>及<sub>三</sub>今愚<sub>一</sub>久伝。佛法興隆者。身之素意也。白<sub>三</sub>少年<sub>一</sub>至<sub>三</sub>大位<sub>一</sub>未<sub>レ</sub>忘。

(中略…A…資料②)

倭漢相和。古今末<sub>レ</sub>聞。涓<sub>三</sub>玄英初四之日<sub>一</sub>。瀝<sub>三</sub>丹實無忒之露<sub>一</sub>。詣<sub>三</sub>六百餘歲之伽藍<sub>一</sub>。」

と記す。

「日本国の人、常の諺に云く、天竺・唐土は仏法すでに滅す。我が国のみ独り盛んなり、と云々。」(采西撰「興禪護国論」(第九門))と伝えるように、天竺・唐土の仏法滅亡は十二世紀末期の日本国内では常の「諺」であったと采西は伝えている。

「大陸における仏法の〈不在〉、裏返すと、日本のみの仏法の〈見在〉。」(横内裕人氏「東アジアをつなぐ禅思想」(村井章介氏『東アジアのなかの建長寺』2014・11 勉誠出版))とまとめる如く、日本のみの仏法隆盛との認識が学侶間に横行していた時期に、実際は「宋における仏教の主流が、禅・律・浄土に替わっただけで、仏教の隆盛は疑いえなかった。」(横内氏同論考)のである。この間の詳論は枚挙に遑なく、藤田明良「南都の唐人」(『奈良歴史研究』54号 2000年)、横内裕人「重源における宋文化―日本仏教再生の試み」(『アジア遊学』122、二〇〇九年)に始まり、渡邊誠「後白河法皇の阿育王山舍利殿建立と重源・采西」(『日本史研究』五七九、二〇一〇年)など、後白河院・重源―阿育王山舍利殿建立に係る問題は極めて重いものである。

このような時代的な趨勢に九条道家とその周辺の敢行した多様な宗教的行事のひとつ、すなわち法華山寺僧や千葉

寺僧が東禪寺版・開元寺版の補刻に捨財した當為は、道家が入宋僧（慶政・了行など）を介して「仏法」の根幹に当たる大藏經の保持を宋の地に試みた當為であり、横内氏前掲論文の言葉を借りれば、従来の教宗である（顕密仏教）

が依拠し守るべき根拠となる宋地の大藏經の廃滅を危惧して行つた善行であつた。また、道家が長財を投じて「自筆（草書体か）」の阿弥陀經を宋の地で十万卷、開版・流通させんと祈願（実行か）を立てたのも、宋代佛教の主流となつていた「禪・律・浄土」に呼応する一連の「動き」であつた。撰闕家主導の未曾有の体制が「現実」となつたかに見えた文暦・嘉禎期の道家が真摯な意図をもって「構想」した「倭漢相和。古今未聞。」の一大善根の一環であつた、と解してみることでもできよう。所は四天王寺、「釋迦如来転法輪之場」であり、「上宮太子所經始之場」である。「佛牙（舍利）」を挙げて「生身」を説く願文（具体的には唐土の阿育王寺が意識されていた）は、まさに「君王輔佐者。家之玄縦也。白古賢及今愚久伝。」、「佛法興隆者。身之素意也。白少年至大位未忘。」の高揚感に溢れる対句である。慶政・成阿弥陀仏の勸進システムに裏打ちされた「橘寺」「法隆寺」などの復興計画は南都・四天王寺を軸にした聖徳太子信仰に支えられていたが、道家は「君王輔佐者。家之玄縦也」としてその「宗教構想」を「佛法

興隆者。身之素意也。」として「遁世・入宋・勸進」という多面的な活動を体現しえた。上人達の「動き」を通（介）して主導した、と捉えることができる。

敢て云うならば、南都諸宗を始め、元來の仏法のあるべき姿が日本にのみ保持されている、という院政期以來の自負（驕慢に同じ）、鎌倉前期の入宋僧による宋代佛教の新規受容が齎した鎌倉中後期以降の自省（驕慢に対する畏怖）天狗の問題か」との混淆・転換の時期に道家の生涯は当たつていた、と考えるのもみるのである。

この小文で明らかにしえた事實は、少なくとも大きく二方向に展開していく。一つは、道家の宗教的な構想が撰闕家の基軸となる粹に沿つて聖徳太子信仰と結び、遡るところ「曾祖禪定相國之草創」の「最勝金剛院」をも願文中に挙げ、更には道長の四天王寺參詣なども念頭に置いて結構されたことである。敢えて申し上げるまでもないであろうが（蜀版大藏經將來をも含めて既に道長へさらには頼通）の問題には上島亨氏『日本中世社会の形成と王権』（名古屋大学出版会 2013刊）などの御指摘がある）、その内実の異なりは、「遁世」「渡宋」「勸進」などが顕在化した具体的な動向（包修と結ぶ）に在る。いま一つの展開は、經典の「手自書写」の功德を内包した写刻体經典の刊行（施印の功德）が、少なくとも宋代に行われていた可能性のあ

ることと日本の十三世紀における春日版などに認められる  
字様（肉太・肉筆風）との関係であろうが、今後の課題と  
させていただく。

本稿のなるに当り、貴重な經典の閲覧調査・書影掲載の  
御許可を頂いた本源寺矢留文麿先生に深謝申し上げます。ま  
た、平成29年度科学研究費基盤（B）（課題番号2628  
4040）の助成に拠る研究であることを明記する次第で  
ある。

（まさきの かずお・実践女子大学教授）